



大阪+知的障害+地域+おもろい=創造

知の知の知の知

社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所情報誌通算 4084 号 2017.12.17 発行

ホーキング青山、古典落語で新境地 目線でキャラ演じ分け



産経新聞 2017年12月17日
落語「時そば」を口演するホーキング青山 =平成27年
10月、横浜にぎわい座のげしゃーレ

■芸の幅を広げる挑戦

生まれつき手足が不自由ながら、車いすで活動するお笑い芸人・ホーキング青山（44）が、ライブで古典落語を披露、さらに先輩芸人と落語の2人会を開くなど、落語に積極的に取り組んでいる。デビューから23年、「障害者ならではのネタ」から一歩離れ、芸の幅を広げるための挑戦だ。（梶

井千春）

1月22日、東京・歌舞伎町のライブ会場。たけし軍団の芸人、グレート義太夫（58）と平成27年から開いている落語会「うそつき迷人会」の舞台に車いすのホーキング青山が上がる。森友学園、芸能人の不倫騒動、日馬富士…。今年を振り返るマクラをたっぷり振った後、ガラクタを集めた道具屋を与太郎が開業、騒動を起こす落語「道具屋」に入る。扇子も手ぬぐいも使わず、目線で人物を演じ分けストーリーを進めていく。オリジナルのギャグたっぷりの噺（はなし）に、50人ほど入った客席から大きな笑いが起きる。

少し早口だが、口調はしっかりしていて、ギャグが面白い。相当に稽古を重ねていると見たが、ホーキングは「所作ができないだけでなく、身ぶり手ぶりを入れられないので人物の描き分けが難しい。やれるネタを考えないといけないんです」と控えめだ。

落語を始めたのは、春風亭小朝ら人気落語家による「六人の会」が企画した大銀座落語祭で、お笑いライブを披露したのが縁だった。小朝に勧められて古典落語「紀州」をやり、さらに六人の会メンバーの春風亭昇太に稽古をつけてもらって「時そば」に挑戦し、ライブで披露。これがウケた。

「見て楽しい落語とやって楽しい落語って、似て非なるもの。400年続いているのは、だてじゃない。面白すぎる経験でした」とホーキングは振り返る。

雑誌の取材がきっかけでお笑いの世界に足を踏み入れたホーキングだが、壁にぶつかっていた。「デビュー当時は車いすの芸人という新しさがあって、何をやってもウケていたんです。しかし、ネタに幅がないので、お客さんに飽きられるし、自分でも飽きてしまう」

落語を口演したのはそんな頃。もともと、高校生の頃から落語界のカリスマ的存在だった立川談志の“追っかけ”をしていた落語好き。突破口になれば、の思いで新しい噺を覚えていった。そして1回目のグレート義太夫との落語2人会。義太夫の師匠で、憧れの存在だったビートたけしがサプライズゲストとして登場したのだ。「俺のしゃべりとそっくりだ、と言ってくださって。大きな財産になりました」と話す。

やれるネタはまだ20に足りない。車いすが登場する新作落語も作ったが、それだけでは芸の幅は広がらないと考えている。「障害者ならではのネタから一歩離れて、時事ネタを

取り入れた新しい落語をやりたい。そこで得たものを漫談にも取り込む。落語は、聴き直すたびに新しい発見があるほど深い。一生かけて挑戦したいですね」

【プロフィール】ホーキング青山

昭和48年、東京都生まれ。先天性多発性関節拘縮症で、生まれたときから四肢は使えず、車いす生活に。平成6年、「史上初の身体障害者お笑い芸人」としてデビュー、ライブを中心に活躍。12月に新潮新書から「考える障害者」が刊行されるなど、著書多数。

障害ある子ら歌舞伎に挑戦 湖西の愛好女性が指導 中日新聞 2017年12月17日

◆27日発表会 浜松の放課後デイサービス

発達障害や知的障害などがある子どもたちが歌舞伎に挑戦している。「湖西歌舞伎保存会」の佐原希依（きえ）さん（24）＝湖西市＝が、浜松市南区本郷町の放課後等デイサービス施設で七月から子どもたちに教えており、二十七日に有名な演目「白浪五人男」の一場面を保護者らに披露する。見えを切る所作も練習し、最後に出演者全員で決めるセリフは「かかろうか〜」。

「回るときは女の子みたいに足を内股に。みんなもだよ。くるっと回ります」

本番まで約二週間の十四日夕、佐原さんが優しく子どもたちに声をかけていた。発表の会場となる教室で、子どもたちは毎日約十五分、練習している。花道を傘を持って歩いたり、皆で並んでセリフを唱えたり。元気の良い声が響く。

この施設は「サンスマイルジョブトレーニング」。特別支援学校などに通う子どもたちが生活や就労のためのトレーニングをしている。

佐原さんは、湖西歌舞伎の舞台に立ちながら、地域で古くから演じられている歌舞伎（地歌舞伎）をツイッターで広めている「歌舞伎系女子」。六月に佐原さんから湖西歌舞伎の定期公演の話聞いた教室長の栗田貴之さんが「子どもたちもできないか」と指導を依頼した。

「歌舞伎って何?」。子どもたちは、佐原さんが幼いころ出演したビデオを見たり、手に「白塗り」を体験してみたりする中で興味を持ち始め、少しずつセリフ読みを始めた。保護者からも関心が寄せられ、目標にもなるため発表会を開くことに決めた。

挑戦する演目の白浪五人男には遠州出身の盗っ人が登場する。披露するのは「稲瀬川勢揃い（せいぞろい）の場」の場面で冒頭五分を演じる。小学三年から高校三年までの十五人を三チームに分け公演し、一人二回、セリフを担当。役柄は皆、自分で選んだ。当日は保護者から借りた浴衣におもちゃのちょんまげを。刀や傘、背景の桜吹雪も職員と協力して準備した。

「文字で読み切れない子も耳で覚えたりと積極的に頑張ってくれた。セリフだけでもと思っていたけど、見えを切るまでの動きや舞台づくりまでもできるなんて」と佐原さん。栗田さんも「声をあまり出さなかった子が出るようになった。セリフの間違いを教えてあげる子もいて、子ども同士の関わり合いも増えた」と変化を喜ぶ。

盗っ人の一人、南郷力丸を演じる石原亜美さん（18）の母、智子さん（53）は「長い文章を話すのが難しいけれど、娘はとても楽しみにしていて、セリフもよく口ずさんでいる。家や学校では触れられない新しい世界を経験できてうれしい」と楽しみにしている。

（野村由美子）

「白浪五人男」 歌舞伎の有名な演目の一つで5人の盗賊の活躍を描く。「稲瀬川勢揃いの場」では、遠州生まれと名乗る日本駄右衛門や弁天小僧菊之助、忠信利平、赤星十三郎、南郷力丸が、七五調の軽快なセリフ回しで自己紹介する。「問われて名乗るもおこがましいが」「知らざあ言って聞かせやしょう」などのセリフが有名。

来年で満10歳の日曜便には、ご自身やご家族の近況を折に触れて、お寄せくださる読者の方々がいらっしゃいます。

大阪府寝屋川市の溝尾圭子さん(47)もその一人。知的発達遅滞はないものの、対人関係を築くのが苦手な「高機能自閉症」の娘さん(23)について、2010年に高校入学、12年にデザイン専門学校の合格と、母親の喜びにあふれたお便りをくださいました。

そしてこのたび、〈どうしても報告したいことがあり、連絡いたしました〉と、5年ぶりのメールが届きました。〈娘の就職が決まりました〉とのこと。朗報です。

お便りには、専門学校に入って以降の5年間がつづられていました。〈専門学校で2年、健常者の方と共に学びました。障害のことも話し、先生や仲間に温かく見守られ、充実した学生生活でした〉

次は就職活動です。学んだ技術をいかそうと、出版社の実習に参加したのですが……。
〈社会人として基本のマナーや決まり事が身に付いていなかったこともあり、ご縁がありませんでした〉

娘さんは、障害の特性であいさつしたり、わからないことを自分から聞いたりすることが苦手だったのです。

ただ、娘さんはくじけず、ハンデを克服しようと、卒業後、障害者向けの就労移行支援事業所に通い始め、約2年、ビジネスマナーなどの訓練を一から受けます。そして就活再挑戦。いくつかはダメでしたが、ついに今年9月、物流会社の採用が決まりました。

〈喜怒哀楽をあまり出さない娘がホッとした様子でひと言、「採用が決まってよかった」。研修中は会社から電話があり、「娘さん、頑張られてますよ」と。あいさつもし、分からないことも聞いているようです。小さい頃は会話も一方通行で、気に入らないことがあるとパニックを起こし、「この子と一生、会話ができないかも」と思ったこともありました。感慨深いです〉

娘さんは現在、朝5時に起床して通勤する忙しい日々。電話で話を聞くと、「就職できるのか焦る時もありましたが、決まってすごくうれしい。重い商品を運ぶ時はきついですけど、頑張ってます」と意欲に満ちたお返事です。溝尾さんは「大変なのはこれから。いずれは親元から自立してもらわないと……。でも課題を、その都度乗り越えていく娘なら大丈夫だと思います」と話されました。

溝尾さんから日曜便に届いたお便りはこの7年で3通です。その3通だけでも、娘さんがハンデを克服して成長していく様子や、親として支え続ける溝尾さんの思いが伝わり、胸が熱くなりました。

次は、娘さんの一人暮らしでしょうか。4通目のお便りを楽しみに待っています。(松永喜代文)

お便りは、〒530・8551(住所不要)読売新聞大阪本社社会部「日曜便」係、ファクスは06・6361・0733、メールは nichiyobin@yomiuri.com です。ウェブサイトでも読むことができます。「日曜便」で検索を。

雲南サンタ ケーキ贈り40年

読売新聞

2017年12月17日

◇村松さん 子どもらに笑顔

◇熊本や東日本被災地も 思い出す涙ぐむ女子高生

雲南市の飲食店経営村松憲さん(70)が、地元や被災地の子どもらにショートケーキを贈るボランティアを始めて今年で40年を迎えた。今月4日には昨年の熊本地震で被害を受けた熊本県益城町の幼稚園を訪れ、各地に届けたケーキの累計は8万個に達した。子ども達の頃、豪雨災害で被災し、支援を受けた。その時の感謝の思いが活動を支える。(中瀬有紀)

村松さんは旧加茂町(現雲南市)で生まれ育った。小学生の頃、両親の離婚を経験し、

その後は母や兄一家との計6人で暮らした。

お礼にもらった寄せ書きなどを前に、「子どもたちの表情が明るくなるのがうれしい」と語る村松さん（雲南市で）

生活は苦しく、土木作業のアルバイトをしながら県立大東高に通っていた1964年7月、山陰一帯を豪雨が襲った。裏山が崩れて、自宅が全壊。各地から届いた救援物資や義援金などに助けられた。「いただいたお金で、寒い冬にジャンパーと手袋を買うことができて。本当にうれしかった」と振り返る。

73年に飲食店を開店。生活に余裕はなかったが、「支援を受けたことへの恩返しをしたい」という思いは募った。30歳だった77年の冬、ショートケーキを手に、サンタクロース姿で地元の幼稚園や福祉施設などを訪れるようになった。

ショートケーキを選んだのは、「誰からも喜んでもらえる」からだ。「子どもの頃、ケーキ店のショーケースに並んでいるのを見ていたが、食べたことはなかった。ぜいたく品だった」。手渡すたび、笑顔になる子どもを見るのが何よりうれしい。費用は毎月少しずつ、お金を積み立ててまかなう。

地元を中心に幼稚園や児童福祉施設などを巡る。2009年には女子大学生殺害事件が起きた浜田市へ。「子どもたちが不安を感じているのでは」と、同市の幼稚園を訪れてきた。

初めて被災地を訪れたのは1995年。阪神大震災に見舞われた神戸市だった。車で向かったが、道路は寸断され、地図を頼りに避難所へ駆けつけた。2004年の新潟県中越地震では旧山古志村（現長岡市）へ、11年の東日本大震災では宮城県東松島市や福島県会津若松市などへ赴いた。

西は熊本、東は岩手まで、移動はいつもワンボックスカーだ。最長19時間半の道のりを一人で進み、ケーキが傷まないように冬でも車内に暖房はかけない。「ただ、子どもたちに喜んでほしいんです」と語る。

40年を振り返り、思い出すのは笑顔ばかりではない。「こんな甘いもの食べたことない」。東日本大震災から1か月半後に訪れた東松島市の避難所。届けたケーキを口にした女子高生は泣きそうな表情で言った。

朝のランニングが日課で、ハーフマラソンにも出場する。「それで体力がつき、遠くまで行けるのかも。体が動く限りは続けていきたい」と言う。雲南のサンタはこの冬も各地を駆け回っている。



キリスト教団体で性的虐待、被害4千人超 豪政府が調査 朝日新聞 2017年12月17日



シドニーで14日、性的虐待を受けた子どもからの手紙をまとめた本を読むターンブル豪首相（右）ら＝AFP時事



オーストラリアで、キリスト教関連団体で性的虐待を受けた被害者が、存命の人だけで4千人以上いる。豪政府の独立調査委員会が発表した報告書で、こうした実情が分かった。中でも約2500人がローマ・カトリック教会で被害を受けていた。調査委は「カトリック聖職者の独身主義」を問題の一因と指摘し、改革を求めた。

豪州では1990年代から、キリスト教会などでの子どもの性被害事件が問題化。豪政府は2013年1月に独立調査委を設け、教会以外の、子どもが

かかわる様々な団体にも対象を広げて、過去90年分にわたって調査を進めてきた。

調査委は15日、性虐待の経験を7981人から聞きとったと発表。報告書によると、分析済みの6875人のうち4029人が宗教関連団体で被害を受け、カトリック教会が2489人、英国国教会が594人など、ほとんどがキリスト教関連。10代前半で被害にあうケースが多く、存命者の64・3%が男性だった。

豪州や欧米のケースでは、教会は被害の苦情を受けると、加害者をほかの教区に異動させて発覚を避けてきた場合が多い。

報告書は、カトリックでの被害について、「独身主義は直接ではないが、一因だ」と指摘。豪州のカトリック教会に対し、ローマ法王庁（バチカン）に「独身主義を任意とするよう求めるべきだ」と提言した。

この問題に詳しいRMIT大学（メルボルン）のデズモンド・カール名誉教授は「(加害者は)被害者に『だれかに言うと神様が怒る』などと神秘的な言葉で黙らせてきた」と解説。一方で、子どもと親密になる環境で性的虐待を加える過程は「スポーツ団体など教会以外でも似通う点がある」と指摘し、採用する際に危険人物ではないかチェックすることが大切だと強調する。

調査委は、子どもを守る政府の専門部局の創設や、性虐待の防止に適切な対応を取らなかった団体に責任を負わせる法令の整備なども提言した。（シドニー＝小暮哲夫）

認知症予防のジム、愛知県大府市が開設 豊平森 朝日新聞 2017年12月17日 18日にオープンする「コグニサイズジム」＝大府市江端町



認知症の予防を目的としたジムを大府市が18日、市保健センターにオープンする。自転車をこぐ要領で運動をしながら認知機能訓練ができる機器を設置。市内にある国立長寿医療研究センターが市と65歳以上の市民の協力を得て研究し、効果的とされる「コグニサイズ」を活用。認知症の不安のないまちづくりを目指す。



「コグニサイズ」とは認知症予防を目的に、有酸素運動などをしながら課題を解くなどの頭を使う作業をして、脳の活性化を目指す活動。例えば、歩きながら引き算をする▽踏み台を昇

降しながらしりとりをする▽床に敷いたはしご形のマスの中を歩き、決まった歩数で外に足を出す—などがある。英語のコグニション（認知）とエクササイズ（運動）を組み合わせた造語だ。

研究グループは2010年から大府市と連携を続けている。市民も参加した研究で、認知症には至らないが軽度の認知障害がある人が、コグニサイズを含む運動プログラムを続けることで、認知機能などを改善できることを突き止めた。

「高齢者見守り」ふるさと納税の返礼品に 青森・むつ 林義則

朝日新聞 2017年12月17日

むつ市は15日、郵便局の社員がお年寄りの自宅を訪れて生活状況を聞き取る「みまも

り訪問サービス」をふるさと納税の返礼品に加え、受け付けを始めた。

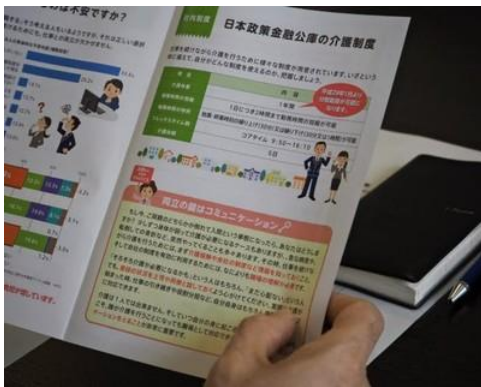
協定締結式で握手をする宮下市長（左）と中江支社長＝むつ市役所



市と日本郵便東北支社がこの日、協定を結んだ。宮下宗一郎市長は市役所での締結式で、市の高齢化率が3割を超え、高齢単身世帯も増え続けていると指摘。「ふるさと納税が家族の絆を深め、優しさでつながる街を実現するきっかけになる」と期待を込めた。日本郵便東北支社の中江紳悟支社長は「郵便局のネットワークを活用して地域社会に貢献したい」と話した。

訪問サービスでは、郵便局社員らが申込者と離れてむつ市で暮らす親などの自宅を月1回訪問。体調や心配事など最大10項目を聞き取って申込者にメールで報告する。訪問時に撮影した写真の添付も頼める。寄付額6万円以上で6カ月、12万円以上で1年間の見守りが受けられる。

「親の介護で転勤できない」 男性社員の申し出増加 日本経済新聞 2017年12月17日
会社が作成した介護ガイドブックを読み込む男性管理職（東京都千代田区の日本政策金融公庫）



親を介護するため、転勤への配慮を勤務先に申し出る男性社員が目立ち始めた。辞令一つで転勤を繰り返してきた企業戦士も、介護問題に直面すれば仕事と生活の両立に悩む。働き盛りに介護退職されては会社も痛手。老いた親を近くで世話したいという希望に応えるために実家近くの職場に転居させたり、転勤をしばらく免除したりするなど会社側も支援を始めている。

「父は今、82歳。母に先立たれてからも元気だったのに80歳を超えてから心身ともにガタツときた」と日本政策金融公庫の男性管理職Aさん（53）は話す。

当時は東京の自宅に実父と妻、2人の子どもを残して、静岡に単身赴任中だった。独りで風呂に入れなくなり、トイレ介助も必要になった。会社に事情を伝え、2016年4月に東京勤務に変えてもらうと同時に、しばらくは転勤を免除してもらった。「金融機関で働く以上、全国転勤は覚悟のうえ。でも、父の介護は自分でしたい」

日本政策金融公庫は09年に転勤特例制度を導入した。家庭の事情に配慮し、希望地への転勤や転勤猶予を認める。現在約340人が利用中。「当初は子育てや結婚を理由にした女性の申請がほとんどだった。ここ数年、親の介護を理由に利用申請する男性が急に増えた」（人事部）。

介護を理由に仕事を辞める介護離職は年間10万人を超えている。国は今春まとめた働き方改革実行計画のなかで「介護離職ゼロ」を目標に掲げた。

介護休業の拡充などが進む一方で、転勤問題は対応が遅れている。日本企業の“正社員”は辞令一つで全国・海外のどこへでも転勤するのが常だった。育児や子育てには関わってこなかった男性も、親の介護となれば妻任せにできない。

紳士服販売会社に勤めるBさん（41）は14年に実家近くの神奈川県にある店舗に希望して転勤した。父親（74）が脳梗塞で倒れたためだ。「父は自分の弟と、息子である私を混同したり、退職した職場に突然出掛けたりするなど意識と記憶が混乱。母に世話を任せていられなくなった」

共働きなので妻に負担も掛けられない。幸運だったのは会社が14年に勤務エリアを社員が希望できる仕組みを導入したこと。勤務地を神奈川県エリアに切り替え、中学生の子ど

もと一緒に実家近くに引っ越して、介護体制も整えた。「エリア限定に替えて、収入は月 5 万円減った。でもいつ転勤辞令があるかと心配しなくてすむ」と喜ぶ。

ニチレイフーズは 15 年に管理職を対象に勤務地を自由に選べる制度を導入した。部長・課長といった肩書は返上するが、仕事内容は極力変えない。経験や能力と比べて職務を軽くしすぎると、仕事へのやりがいや失う恐れがあるからだ。

中日本地域に勤務する C さん（57）は 11 月に転勤免除を申請した。「今の勤務地に妻の実家がある。84 歳の義母が障害を持つ義理の弟を世話しながら暮らしている。これからは私たち夫婦で 2 人をみたい」

現在はチームリーダーとして部下を持つ。正式な発令は来春だが、転勤免除になっても部下を管理監督する役割から外れる以外は今の業務と変わらない。「今の仕事に満足しているので安心して申請できた」。群馬、千葉、東京、金沢、長野、名古屋と転勤続きの人生だった。「最後の住まいは自分で決めたかった」と話す。

15 年の要介護認定者で要介護 3 以上の人のうち、特別養護老人ホームなど施設利用者は 100 万人。残る 124 万人が在宅介護を受けている。在宅介護は今後も増え、25 年に 163 万人に達する見通しだ。野村総合研究所制度戦略研究室長の梅屋真一郎さんは「介護で働けない人がこのままでは急増する。勤務地や時間にとらわれず働ける環境を企業は早急に整えないと、貴重な働き手をいずれ失う」と主張する。

■企業 離職防ぐ手立て模索

独立行政法人の労働政策研究・研修機構（東京）の「企業における転勤の実態に関する調査」（2017 年）によると、転居を伴う転勤がある企業のうち、84%は家庭の事情を踏まえて転勤に関する配慮を社員が申し出る制度・機会をもっている。

過去 3 年間の配慮理由をみると、男女ともに「親等の介護」が 1 位。特に男性は 75%にも上っており、様々な両立問題の中でも仕事と介護の両立は男性も避けられない喫緊の課題となっている。

エスビー食品は 2009 年に育児や結婚、介護など家庭の事情によって転勤を免除する仕組みを導入した。現在総合職の利用者は二十数人。うち 6 割が男性で、その半数が介護理由だ。「親の介護に直面する年代は会社の中でも働き盛りの時期。介護離職は避けたいが、介護を理由にミドル層を異動させられなくなるなど組織が硬直化するリスクもある」（人事総務室）

団塊世代は今後順次 75 歳を超える。団塊世代が要介護となるのも、彼らの子ども世代が管理職に就くのもこれからが本番だ。介護離職を防ぐには転勤猶予制度は有効だ。ただ介護は子育てと違い、いつまで続くか先が読めない。どこまで手をさしのべるのか。企業も答えを模索している。（編集委員 石塚由紀夫）

大阪市子どもサポートネット 来年度開始方針を確認 大阪日日新聞 2017年12月17日

大阪市の吉村洋文市長を本部長とする「大阪市子どもの貧困対策推進本部会議」の第 7 回会合が 15 日、大阪市役所で開かれた。市関係部署に加え、関西経済同友会、大阪教育大、大阪府立大からも有識者が参加。行政・学校・地域で子どもと子育て世帯を支援する事業「大阪市子どもサポートネット」（仮称）を来年度から開始する方針を固めた。

企業との連携方法や必要案支援を確実に届ける方法について議論する会議の参加者＝15日、大阪市役所

大阪市子どもサポートネットは、区長のマネジメントで、区役所、学校、子ども食堂や企業などの地域資源を結びつける仕組み。

区役所に保健福祉と教育の分野をコーディネートする機能を新設し、コーディネーター



や福祉の観点から子どもを支援するスクールソーシャルワーカー（SSW）が担当の小中学校を巡回する。

市が4月に公表した「子どもの貧困」に関する実態調査で、「世帯の経済状況が、子どもの生活や学習環境、学習理解度にも影響」「若年で親になっている世帯や一人親世帯は経済的に厳しい」といった実態が判明。支援の必要な子どもを発見する仕組みが必要とされていた。

核となるのが、校長・教頭・担任・養護教諭などによる「チーム学校」にSSWやコーディネーターを加えた「スクリーニング会議」。多くの教師らの多面的な視点で一人一人の生徒を見ることで、課題を抱える子どもを発見し、適当な地域資源につなぐなど支援方法を検討する。

来年度から、6～8区で同事業を展開し、課題などを洗い出した上で全市に展開する。

吉村市長は「社会全体で子どもの貧困対策に取り組む」と話した。

「取り調べの刑事を好きに…」自白で逮捕、服役 湖東記念病院の再審請求抗告審、20日に可否決定

産経新聞 2017年12月17日

支援者らが開いた「囲む会」で話す西山美香さん＝10月28日、滋賀県彦根市



滋賀県東近江市の湖東記念病院で平成15年、入院患者の男性＝当時（72）＝の人工呼吸器を外して死亡させたとして殺人罪で懲役12年が確定、服役した元看護助手、西山美香さん（37）が申し立てた第2次再審請求の即時抗告審で、大阪高裁（後藤真理子裁判長）は20日、再審の可否を決定する。弁護団は男性が病死した可能性が高いと主張しており、高裁の判断が注目される。

15年5月、湖東記念病院で入院中の男性が死亡。滋賀県警は、男性の人工呼吸器のチューブが外れ、異常を知らせるアラーム音が鳴っていたのに適切な処置がなされなかった疑いがあるとして、捜査を開始。当時、当直の一人だった西山さんが「人工呼吸器のチューブを抜いた」と供述し、16年7月、殺人容疑で逮捕された。

犯行の動機は「病院に恨みがあった」などとされたが、西山さんは大津地裁での公判で、「取り調べの男性刑事が好きになり、気を引こうと思って自分が殺したと言った」と否認に転じた。

だが地裁は17年11月、自白の信用性を認めて懲役12年の実刑判決を宣告。大阪高裁、最高裁も支持し、判決が確定した。

西山さんの弁護団は、人工呼吸器のアラーム音を聞いた証言がないなど、証拠は乏しいと主張。22年9月、「自白は虚偽の供述」とする専門家の鑑定書などを大津地裁に提出し、再審請求した。しかし棄却され、不服申し立てに当たる大阪高裁への即時抗告や最高裁への特別抗告も退けられた。

西山さんは24年9月、事件と同種の人工呼吸器でチューブの接続に不具合があるケースが見られるとの新証拠を大津地裁に提出し、2度目の再審請求。棄却後の大阪高裁での即時抗告審では、男性が致死性不整脈を起こして病死した可能性を示す医師の意見書を提出し、検察、裁判所との3者協議が続いていた。

西山さんは産経新聞の取材に「取り調べでは刑事の言う通りに話を合わせてしまった。いろんなことを相談するうちに好きになっていった。私は殺していません」とした上で、「両親や支援者の方がこれまで支えてくれた。自分は無実であることを示したい」と話している。



月刊情報誌「太陽の子」、隔月本人新聞「青空新聞」、社内誌「つなぐちゃんベクトル」、ネット情報「たまにブログ」も
大阪市天王寺区生玉前町5-33 社会福祉法人大阪手をつなぐ育成会 社会政策研究所発行